

ビオスの育ちにおける接触に関する意味の研究
 一人間と伴侶動物の重要な他者性を手がかりに一
 矢野 泉

A Study of meanings of Contact on Growth of Bios

:From the focus on important-otherness between human being and companion animals.

Izumi YANO

1.はじめに

触れているのに触れていない身体に到来する重さを感じることができる働きを、わからなかったことがわかるようになる変成、すなわち育ちと措定しておこう。本稿の方法論的位置取りはアンドラゴジーと現象学に依拠している。たとえば、アンドラゴジーの提唱者のひとりであり、教育の目的を生活の意味の探求に据えたエデュアード・リンデマンのように。リンデマンのように、共に接触の経験を育ちの基礎に置くという方法は大人を学習者として想定することが第一の要件であるが、大人と子供の境界があいまいになり、子供のような大人、大人のような子供、動物のような人間、人間のような動物が現前するならば、リンデマンが設定した加齢による発達段階を基準とする大人と子供の垣根、アリストテレス(アリストテレス,2001)が設けた人間と動物(以下「動物」と称し、「獣」と区別する) 隔壁は留保される。

現象学の祖エドムント・フッサールは、自己の経験についての反省と記述を往来する方法により、日常の闇に叡智の光を照射し、見えない意味を見えるように努めた。現象学者の村上靖彦によると、「プラトン以来『驚き』こそが哲学を駆動させている。差異がないところには驚きが生じにくい。他者とは驚きを作り出すための方法」(村上靖彦,2011:265)である。生物として生存するだけのゾーエには見られない働き、情動や知覚を有するビオスの愛撫という接触を省察し、叡智ある感覚を生命の糧となし、ビオスを人間であれ動物であれ、愛撫という接触の経験から育つ存在とする。

つぎに、本稿における研究目的を明示する。それは、ビオスが接触を通じて育つことの意味づけである。触れ、育つことの意味を問うことが、触れないことで育つことの意味を問うことでもあることを同時に確認しておく。また、本稿は、前景に、ジャック・デリダの接触についての研究を措いて、後景にジャン=リュック・ナンシーによる<ノリ・メ・タンゲレ(私に触れるな)>を措き、接触の意味を明らかにすること、加えて、動物たちのエピソードを先述の前景と後景に重ねて、論考を深める。なお、本稿引用部の傍点及び斜体文字並びに太字については、引用原典のまま記す。

2. 接触の法について

デリダによると、接触には法、すなわち決まりがある。日常において、人間であれ動物であれ、いきなりつまりなんの前触れもなく触れることはゆるされない。「触れていながら、触れることが禁じられる。ものそのものに、触れるべくあるものに、触れるな、と。」(ジャック・デリダ,2000,:134) 丁度よい塩梅の心地よさを保つには、人と人あるいは人と動物の間に尊敬が求められる。

「尊敬がわれわれに、尊敬すべき法との距離を保ち、それに触れないように命ずる。したがって触れえないものに。眼差し(これはラテン語の固有語法では尊敬を意味する)によって距離を保った触れえないものに、あるいはいずれにせよ触れ、触発し、墮落させないように注意深く警戒し用心する(*achten,Achtung*)のために距離を保った触れえないものに」(同前:135) 対して。「触れることを通常の意味で理解するのではなく、触れずに触れうること、触れることがすでに過剰であるときに触れすぎずに触れうること」(同前:同頁)である。デリダはこうも考える。「触れることは隣接したものであり続け、自らが触れないものに触れる。それは、自らが触れるものに触れず、触れることを禁欲する。またそれは、欲望と欲求の只中で自らを抑制する禁欲のなかで、実はその欲望を形作っている抑制のなかで、自らの糧となるものを食べずに食べる。自ら耕し、育て、教育し、訓練する(*trephein*)ようになったものに触れずに触れ」(同前:136) する。

デリダのように考えるならば、触れることは見ることと区別される。眼差しには適度の距離が必要である。近すぎても見えないし、遠すぎても見えない。育ちについても同じように考えられる。触れすぎてもうまく育たないし、まるきり触れないでいても育たない。大人にせよ子供にせよ、人間であれ動物であれ、食べたり耕したり育てたり教えたり訓練するなかでやりすぎることはよいことではない。やりすぎることはよいことではないという教えは、デリダにいわせると、アリストテレスからナンシーの思想に貫かれている。触れることについて、アリストテレスは『魂について』の論考において、殴打から愛撫まで思弁している。殴打にせよ愛撫にせよ、「肉の重さ」なくして、触れるという経験すなわち接触もしくは触覚の経験を語ることはできない。これはむしろ、ナンシーが「接触のコルプス[資料体]と呼んでいるもの」(同前:139)である。デリダいわく「そっと触れる、軽く触れる、押す、深く押し入れる、締めつける、なでつける、引っ搔く、擦る、愛撫する、触診する、手で探る、こねる、マッサージする、絡み合わせる、抱き締める、殴打する、つまむ、噛みつく、しゃぶる、湿らす、掴む、放す、なめる、搔する、見つめる、聴く、嗅ぐ、味わう、避ける、キスする、あやす、バランスをとる、支える、重みを持つ」(同

前:140)が「接触のコルプス[資料体]と呼んでいるもの」(同前:139)である。「重みを持つ」ことは、挙げられた接触例すべてに通底するのではないか。これは、デリダの見立てであり私の見立てでもある。触覚と視覚は重みで区別される。

たとえば、動物から視線を送られる時、私は頭や顔、背中や胸で視線を感受し、見られていることを意識する。私が動物に視線を送る時も動物は私を振り返る、あるいは、体表の変成を呈する。しかし、動物の舌で手の甲をなめられる時、動物の舌遣いの重みを感じる。[動物の愛撫 1 と 2]を示す。動物たちは接触していて、舌遣いによる愛撫が観察される。動物が動物をあるいは人間をなめるのは愛撫であり、人間が動物をさするのや抱き締めることも愛撫である。しかしながら、デリダは愛撫を触れることから弁別する。愛撫は触覚に属さず、「接触を越えた接触」(同前:150)もしくは「根本的混迷」(同前:151)としてエマニュエル・レヴィナスを参照しながらデリダは愛撫を論考するのだが(同前:150-180)、デリダの愛撫に関する論考は私には鮮明な解として示されず、愛撫



[動物の愛撫 1]

※筆者撮影:2015年9月7日。



[動物の愛撫 2]

※筆者撮影:2015年9月7日。

は接触であり接触でないという両義的な理解を得る。

しかも、デリダはデカルトやカントを引きながら、愛撫を触れてはいるが「触知不可能なものであり続ける」(同前:142)と思弁する。言い換えると、触れてはいるが、「触れることができないものであり続けることができる」(同前:同頁)「叡智的なもの」だとデリダは述べる。デリダの思弁によれば、愛撫は触覚というより知覚に属する。いうまでもなく、前期ポンティの『知覚の現象学』

や『眼と精神』、後期の『シーニュ 1』及び『シーニュ 2』、遺作ともいえる『見えるものと見えないもの』において、メルロ=ポンティは触覚を知覚として捉えている。しかし、メルロ=ポンティせよデリダにせよ、動物に「叡智的なもの」がはっきりと確認できると明言はしていない。ダナ・ハラウェイはデリダを含めて西欧の哲学における人間中心主義をラディカルに叩きのめし、人間を動物の伴侶種として捉え、動物が人間をリードする主体とすらみなし、テクノバイオポリティクスの時代を生き抜く異種協働の豊穡さについていかに人間が思考を停止させてしまうのかについて、伴侶種が遺伝子交流においていかに重要な他者があるのかについて、『犬と人が出会うとき—異種協働のポリティクス』（ダナ・ハラウェイ,2013a）や『伴侶種宣言—犬と人の「重要な他者性」』（同前,2013b）で論じている。ハラウェイは犬と人のエスノグラフィーを通して犬の自然—文化世界を明らかにすることにより、犬が叡智的であり愛撫の文化を有することを示している。筆者が撮影した[動物の愛撫 1] [動物の愛撫 2]は、左手の動物の排せつ介助を右手の動物がしている場面である。右手の動物は愛撫によって左手の動物の血流を促進させて身体を温めて排せつをしやすくさせると同時に、加齢と疾患の進捗により起き上がることのできない左手動物の排せつへの安心感を与えている。筆者はハラウェイと同様に、人間中心主義が科学の世界を狭めていると思量する。1998年にデリダが著した"L'animal que donc je suis"が鵜飼哲による邦訳『動物を追う、ゆえに私は(動物で)ある』（2014）が、デリダもまた人間中心主義を批判していたことを評価するのであれば、ハラウェイはデリダに関する見解を見直すだろうか。ハラウェイは犬、デリダは猫と暮らしていた。

3. メルロ=ポンティの後期知覚論について

デリダは、メルロ=ポンティの『シーニュ 2』（メルロ=ポンティ:21）から引用し、「『*Einführung* (感情移入)の謎の全幅は、その「知覚論的」段階にあるわけであり、そして、それも一つの知覚にほかならないのであってみれば、そこで解かれていることになるのである。他の人間を「定立」するのは知覚する主体であり、他者の身体は知覚される物であり、そして他者そのものは『知覚するもの』として「定立」される。問題は、共知覚(co-perception)以外のものではない。私が、自分の右手に触っている私の左手に触ると同じように、私はそこにいる人が見ているのを見るのである』（中略）このテキストや他のテキストが示しているように『同じように』という問題構制を通じて」（デリダ,2006:372-373）感性や受肉に関する存在論さらにはメルロ=ポンティ独自の触覚論が形成されるのである。メルロ=ポンティはエドムント・フッサールが

視覚と触覚を分離して思弁したのに対して、メビウスの輪のごとく一帯の俎上にのせて、視覚と触覚を弁別しつつ共通項のある感覚として、つまり共知覚であり共感覚としてフッサールから袂を分かつて提示したのである。

加えて、「1.一方は、眼差し、原的直接性、感性的な現前化、一致、『混同』、共知覚などの特権を要求する。そして、2.他方は、これも完全に直観主義的なのだが、隔たり、不適合、距離、間接化、不一致などの経験を、同じ価値のなかに再記入することになる。(中略)一致と不一致は一致せず一致する、等々。別の仕方でも《cum》[共に]と《avec》[共に]について考えねばならない」(デリダ,同前:374-375)とデリダは論ずる。しかしながら、「《cum》[共に]と《avec》[共に]」にせよ、同化つまり同じにする、という含意ではなく、異化つまり違ったままでという含意でもなく、《cum》組み込み(組み込まれ)、《avec》同伴する(同伴される)、他者の身体は、共知覚を形成する可塑性ある基器であると、デリダの論考を跳躍させて考えることもできるのである。

この他者の身体は人間に限定されるのだろうか。デリダによればそうである。しかし、ジャン=リュック・ナンシーとの共著『共出現』もあるジャン=クリストフ・バイイは、動物が人間とは別様の存在でありながら人間に相通ずる知性を人間との環世界において有している存在であるということ、メルロ=ポンティの1956年から1960年にかけてのコレージュ・ド・フランスにおける講義で考えられていたことを『思考する動物たち—人間と動物の共生をもとめて』のなかで明らかにしている(ジャン=クリストフ・バイイ:113-115)。メルロ=ポンティの前期と後期の思想には連続もあるが分断もあると筆者はバイイのように見立てている。

したがって、デリダはポンティの『見えるものと見えないもの』から「世界はわれわれの見ているものではあるが、しかし同時に、われわれは世界の見方を学ばなければならない。それは何よりもまず、われわれが知を通してこの視覚に到達し、この視覚を身につけ、われわれとは何であり、見るとは何であるかを言わなければならない、したがってわれわれはこの視覚については何も知ってはいない……かのようにふるまわなければならないという意味においてである」(ポンティ,1994:12-13)を抜き書きするが、「見えない生活、見えない他者、見えない文化、について問うこと。『もう一つの世界』の現象学を、想像上のものや、『隠れているもの』についての現象学の越えてはならぬ限界をみなすこと」(同前:334,378-380)についてのポンティの関心の深化に注目し、後期ポンティ現象学から「<触覚『なるもの』は存在しない>」(デリダ,同前:389)が、「『卓越した触覚は存在する』」のであり、しかもこの触覚は『われ惟う』として存在し、また結局それは私の肉に他ならない」(同前:同頁)と指摘した。

デリダはさらに、ポンティのいう視覚を下部構造であるというポンティ自身

の思弁を掬い上げ、イデーなる観念が肉の昇華であり精神であり思考であり(ポンティ,1994:390)、視覚及び触覚が在を確認する基体であることとして思弁し、下部構造からの思考の出現を説明しようと試みたのである。ここまではデリダはポンティを異存なく評価している。しかしながら、デリダは、ポンティが「触れえぬものとは意識ではない」(ポンティ,1994:372-373)と論じた点を注視した。触れられるものだけでなく、触れえぬもの、いや、触れられないものが触れられるもののうちで少なくないことを考慮するなら、ポンティには下部構造からの思考の出現を説明しきれない、とデリダは評した。ポンティによって遺された著作から判断するなら、デリダが見立てるようにポンティの現象学的存在論は課題を残したといわざるをえない。というのも、ポンティは視覚と触覚を別々なものとして区分することなく接合させて論じたからである。

したがって、視覚と触覚別々なものを接合する論理として、デリダがポンティの下部構造に基づく知覚論を納得できない論理と判断したことも無理からぬことであろう。デリダにとっては「接合させる論理」に反する論理が重要であり(デリダ,同前:391-398)、デリダより若い世代のジャン=リュック・ナンシーの共有=分割論を、納得できない「接合させる論理」に反する論理として、かつ、論理整合性の観点からも、メルロ=ポンティの知覚論よりも明瞭に了解できる思弁として、ナンシーによる身体の共有=分割論を歓迎し、『触覚、ジャン=リュック・ナンシーに触れる』を著した。

4.ジャン=リュック・ナンシーの身体あるいは触覚論について

メルロ=ポンティの知覚論で思弁された「触覚『なるもの』は存在しない」ことをデリダに再認識させたのはジャン=リュック・ナンシーである。(デリダ,同前:414)。

デリダは、『単数にして複数の存在』におけるナンシーの議論から、共生と述べる時の「共に」には固有の尺度はなく、それ故、共約不可能であり、共生は「共に～ある」とはなりえず、「極限のパラドクスにおいて、他者は<共に>にとっての他者として露わにされる」(デリダ,2006:375-376)と思弁する。さらに、「触覚もしくは接一触コンタクトの、現前化の、出現の、共一出現の核心につねに共有=分割の法がある。分有パルティバシオンとしての、かつ出現としての、連続性、中断、それに失神した鼓動としての共有=分割。無為の共同体の倫理が、その政治もしくは権利=法が、そしてその思考が、この共約不可能なものや『共にあっての他者』の試練を通じて宣告される。安心できる『隔たりと接触の同時性』においてですらなく、そのなかで、『非決定そして問題』であり続けるものと共に[宣告される]。それゆえしばしば(すでに指摘したが)ナ

ナンシーの思考がそのように決断し、またつねにまさに「共約不可能なもの」を計測し、「共約不可能なもの」と対決しつつ思考することを決断するのであるから、ナンシーの思考がメルロ=ポンティと『共に』あり、メルロ=ポンティなるものに可能な限り近くかつ遠い」(同前:376)とデリダは論じ、「『共にとつての他者』は、あらゆる同時性を、共出現を、共約可能性を中断する」(同前:同頁)というナンシーの議論に同意しつつ、他者と共にあるためには「『自らを空間化=間隔化する時間』であり、(中略)『共有=分割する移行の空間』」(同前:377)を他者を知覚し他者と共にある議論に挿入したことが、他者あるいは触覚論のアポリアを解決する明確な知見であるとして、ナンシーを称えるのである。

ナンシーは、空間も時間であると措定する。時間の移行が空間の移動を生むのである。接触の規則は、「触れえないものに触れる、あるいは触れずに触れる、触れることのできるものや触れられたものを通過しながら触れる、触れることなしに触れる、触れられるものをその彼方にむかって横断しながら触れる等々である。(中略)このような共一存在の同時性において彼が追究したのは、『時間が必要である』『空間が必要である』」(デリダ,同前:377)といえる。

「触覚『なるもの』は存在しない」とナンシーが思弁する論点に戻ろう。この論点に取り組むためには、われわれの住む現代が、ダナ・ハラウェイが指摘したようにテクノバイオポリティクスが盛んな環境に置かれていることを忘れてはならない。デリダも「機械、人工補綴、換喩による代替物、『他の感覚の代わりとなる一つの感覚』のための場所は開かれて」(デリダ,同前:424)いと述べた。接触もしくは触覚は、ナンシーの思弁によれば、他の時間、他の場所への出発=分離を成し、「精巧な義手、義足による補綴、運動補助、人工内耳、人工網膜など(中略)サイボーグ」(金森修,2007:22)や「脳コンピュータ・インターフェイス」(同前:23)の助けなしに論じることは困難である。デリダがナンシーから読み取る、「手の『触覚』(カッコつきの)が、『機械』によって『無限に迂回され』差延される」(デリダ,同前:425)というのは、サイボーグや人の手による代替物や運動補助という「身体技術的装甲」(金森,同前:23)を現代のビオスはもはや外せないのであり、金森が『装甲するビオス』で論じたように、ナンシーの鍵概念である<共有=分割>及び<出発=分離>は触れられる身体が触れられない身体と瞬く間に成り変わる様を記述しているのであり、『私に触れるな—ノリ・メ・タンゲレ』でナンシーが示した固有化も同一化もしない身体は、接触もしくは触覚が触れられないことを確認する他者の身体のうちで、「消え去った」私の「真の身体となる」(ナンシー,2006:68)のである。ナンシーのいう「消え去る」すなわち「消滅が演じられる突発的出現のまさしく範例として、ヨハネによる福音書の一挿話」(同前:21)を引きながら、ナンシーは「一

一般的な譬えの場面」(ナンシー,同前:同頁)で、イエスは「話、語りかけ、そして去ってゆく。自分が現にそこにいるということ、そしてすぐに立ち去るということ、それを言うために彼は話す。人がいると思う場所に自分はもういないということを、たしかに現前しているにもかかわらず、自分はすでに他処にいるということを、他者に伝えるために彼は話す。此処に、しかし此処そのものではない」(同前;同頁)からだとナンシーは分析する。「この挿話は『ノリ・メ・タンゲレ[我ニ触レルナ]』のタイトルで知られ、とくに絵画においては、非常に頻繁に扱われてきた」(同前:同頁)のであって、「《墓のキリストとマグダラのマリア》[別題《マグダラのマリアに姿を現すイエス》]」(同前:22)のタイトルのついた絵画が西欧では知られている。墓に埋葬されたはずのイエスの姿がなく困惑するマリアに対して、「現前しているにもかかわらず、自分はすでに他処にいる」、だから、触れてはならないということをイエスはマリアに伝える。ナンシーはいう、「『私に触れるな』は触れる文言」(同前:23)であると。「触れることがすぐれて構成する、あの敏感な点に(それは結局、感覚可能なものの点『なるもの』[《le》point du sensible]である)、そして触覚のうちで敏感な点を形成するものに触れる。ところが、この点はまさしく、触覚が触れない点、その<触タッチ>[la touche](その芸術、その感触、その優美[=恩寵])を行使するためには触れてはならない点である。つまり、それは、触覚が集めるものを分かち、広がりをもたない点あるいは空間であり、触れられたものから触覚を隔て、それゆえ<触>それ自身から<触>を隔てる線である」(同前:24)とナンシーは示す。

触れられたものから触覚を隔て、それゆえ<触>それ自身から<触>を隔てる線を別のいい方をするならば、まったく触れられていないかのように触れられているという感覚は、指先や指のささくれ、爪の割れ目、瞼や唇、肘の突端の場所、すなわち身体縁や端において起き上がるのである。デリダは指摘する、「触れられるものが、その端で触れられているのであり、またしたがって触れられないものそのもの、つまり端の他の端を露呈することによって、触れることに到達するのである。しかし、また、そこにレトリックを統合する必要があるだろう。そのレトリックが各々の比喻形象において、感性的なものとの、物質的なものと精神的なものとの間の限界を突破するとき『自己の身体』の肉的なものは、定義上、限界の両側に見出されるものである(後略)」(デリダ,2006:564)と。

確かに、デリダが指摘するように、ナンシーは種々様々なレトリックを以下のように多角的に用いる。「1 グラムの思考。ごく微量の重みをなすこと、スクルーブル[細心な配慮、元は約1・137gに相当する重量単位]と呼ばれる小石の重さ、当惑させ次のように問うことを強いる殆ど何ものでもないものの重さ、

つまり、なぜ何もものもないのではなく、幾つかのものが、幾つかの身体があるのか、なぜこの創造なのか、そして創造が言表するものすべて、言表されないものすべてなのかと。1 グラムの思考。小石の、この計算の痕跡、彫り込み、微笑の切り込み、刻み目、毀損=開始、尖端の硬質な点、錐、毀損=開始の身体そのもの、毀損=開始された身体、自らがそれである**この身体である**ことで、**脱自する**(外へ越え出る、死ぬという意味の動詞)ことで共有=分割された身体。皮膚は一つの器官ではない、それは、様々な点、尖端、痕跡、彫り込み、擦り傷、線、折り目、牽引線、切り込み、分裂、決断=分断、文字、暗号、形象、互いのうちに刻み残され、相互に絆を解かれ、滑らかで線條がつけられ、平らでざらついたエクリチュールのこの[共同一体]である。(中略)思考することの引き退きのうちの思考。このグラム[重量単位の他に、刻み書かれたものの意味もある]に触れること、この系列、この延長。思考は自己であることなく、自己に回帰することなく、自己に触れる/触れられる。(中略)触覚が、措定=設置と脱措定=解体が、世界内の諸身体の往一到来のリズムが存在するのだ。自己自身から解かれ、共有=分割された触覚」(ナンシー,2006:82-83)である。

しかしながら、ナンシーの言表は、抽象的なそれではないと読める。デリダも著作で論及していることでもあるが、ナンシーは他人の心臓が移植されて生きながらえている。移植手術において、ナンシーの身体には尖端を持つメスを入れるための目印が切り込まれ彫り込まれ、傷一つなかった身体は線が切れ味鋭い刃物で滑らかに刻みつけられ、肉と襞が切開され、自己固有の心臓は他の臓器や管と取り持っていた絆は解かれ、身体の中の諸身体は分断され分裂され、他の心臓が身体に侵入し、他者の心臓が他者の身体から分割され、他者の心臓はナンシーの考える身体を動かし、ゾーエ(Zoe)として生物の生命を維持するばかりでなく、ビオス(Bios)として「生物の判断を支え」(金森:3)る状態を創造しているのである。ナンシーの考える身体運動が開始されるのは、身体が自己自身から解かれ毀損された時なのである。故に、ナンシーが「措定=設置と脱措定=解体」及び「世界内の諸身体の往一到来のリズムの存在」についての言表の的確さがあるといえると同時に、なるほど確かに、他者の心臓が他者によって共有かつ他者であるからこそ分割されていると言表しうるのである。

5. ハルとソラにおける愛撫と出発=分離のエピソード

2015年6月に入った頃か、両眼を失明している糖尿病患者のソラは脚数の多い椅子脚に右眼をぶつけたのか、白眼の端が赤みを帯びた。結膜炎か角膜炎かいずれにしろ自然と回復すると油断し、幾日も経過した。ところが、白眼では

なくねずみ色の瞳が隆起を始めて、ソラは 35 cm×45 cmの長方形伴侶動物用ベッドの片隅に右目を擦りつけるようなあるいは押しつけるような格好で横たわるようになった。インスリン注射はきっかり 12 時間間隔で朝晩 1 回ずつ決められた量を飼い主が処置するわけだが、このきまりを厳密に遵守しなければ、からだの小さなチワワの場合、低血糖を惹起しショック死へと至ることを動物病院の担当医から及び電子資料から説明されていた。しかも、インスリン注射治療は始めたら生涯やめることができない。糖尿病初期段階の特徴でもある多飲多尿に異変だと気づいたのは、数多くの動物の世話を長い年月世話をしているペットシッターであった。チワワであれば 7 歳からシニア犬とされるため高齢故の他の原因が考えられたかもしれないが、血液検査の結果、血糖値が正常値をはるかに超えていて、腎臓に問題があるか糖尿病ではないかと指摘したペットシッターの洞察通りであった。

突然のリスクを回避することと当事者であるソラの生活の質をまず私は優先した。糖尿病の合併症白内障と脱毛症、脱力症状がもう顕現し、このうえ死亡するまでチクリとでも痛い思いをさせることは、彼女にとっていかなのだらうと問うた。医療環境がまったくと違っていいほど優れている人間と異なって、動物の医療環境は法律からまず違っており、人間に投じられる社会保障としての医療の埒外であるためいかに獣医や伴侶である家族が努力しようと、病が完治するしないし寛解することはありえず、死亡を先送りすること、死亡するまでの生活の質を当事者と家族にとって次善のものとするのできる行為なのである。糖尿病が進行すれば、食事によって得た栄養を体内に取り込むことがかなわず、筋肉、内臓、骨、歯、皮膚、等々が本来含んでいる物質を必要な栄養代替物として食いつぶしていく。故に、糖尿病患者は痩せて体重が落ちていく。前章で金森の論述を引用して、ビオスの装甲について記述したが、ソラにとっての装甲、生きる、生活をしていくための代替物は自らの肉体であった。

金森の論考では、「とにかくビオスは『ただ生きている』という形で自分を捉えることはなく、『自分は今、不快に生きている』とか『自分は今、心地よく生きている』という形で自分を捉える。そして、不快なら不快でないようにするための方策を探し、心地よいなら、その状態を可能な限り消す属させるための方法を探す(中略)自己の生命の状態に対する質的評価の眼差しをもつということは、ビオスにとって本質的である」(金森:8)と示される。よって、ナンシーが「共同-体コルプス」で「一つの身体は他の身体へと捧げ与えられた一つのイメージ」(ナンシー,1996:86)と表現したように、人間と伴侶動物は、触れているのに触れていないビオスとして、心地よく生かされる触覚類であると捉える。

本稿 2 章で示した写真[動物の愛撫 1][動物の愛撫 2]は群れで生きる重要な他

者性を分有する〈触覚類〉であるという自覚のある一方の動物が他方の動物の排便介助をすることによって、介助されているソラ(雌/撮影時 15 歳 25 日)の快感ばかりか、介助しているハル(雄/撮影時 15 歳 6 か月 0 日)快感をも創出させる。排便介助は数日にわたって確認された。動物による排便介助 4 日目、ハルはソラ排便介助を行わなかった。私はソラの食事介助を行い、排便したいという身振り、前脚をバタバタされて私に介助を要請していることに気づいた。いや、私が寝室にこもっている間とくに深夜や未明以外、仕事や買い出しなどで外出しなくてよい、かつ、仕事部屋にこもりきる時間以外の排便介助は私が行っていた。排便介助は、疾患ないし高齢による筋力減退のため自力で排便できず大腸に滞留した便を指の腹を用いて巧みに対象動物の肛門から便を押し出す行為であり、獣医の技術である。とはいうものの、動物の場合、動物愛護法が存在するだけで、民法の基準では生命とみなされず、「者」ではなく「物」として布置される。たとえば、動物愛護法に違反して、動物を故意に殺したとすると、殺害ではなく損壊というほうが法的には的確な表現なのである。ナンシーのコープス論では「毀損=開始された身体」という概念が用いられるが、殺害ではなく毀損ということならば、人間だけでなくビオスとして生活する動物にも、かかる概念は汎用される。

チワワのような超小型犬の腹は、糖尿合併症の末期となると、その身体回りはキーボード・マウスとほぼ同じ厚みであるから、その小さな腹を指の腹であるいは指先をソラの腹の負担にならぬよう巧みに指遣いする。排便の身振りが示され、排便の兆候あるのみで肛門が開かない場合は、肛門に清潔なウェットタオル越しに接触し、犬専用美容液を噴射してしばし待つと、肛門が開かれていく前兆である茶色の体液が分泌される。液体をぬぐい、さらにしばし待つとゆっくりと肛門が私の親指の指回りと同じぐらいに開き、茶と黒檀が相半ばする色合いの硬さもほどよい便が眺められる。ソラの肉体は筋力喪失でもはや脚や首が起き上げることのできない塩梅であるから、ソラの首が折れてしまわないように注意を払いながら、私の右手でソラの身体を抱き起し、左手でソラの息遣いに合わせて少しずつ腹のなかの便をソラの皮膚と腸壁の覆いを意識しながら押し出していく。

排便介助最初のころは、私の指が接触するだけでソラは排便できたが、しばらくするとソラに排便できる筋力や腸の運動能力は喪失されて、私の指の運動がソラの肉体、私の指は腸の蠕動運動の代替となった。われわれは指をもしくは内臓を共有=分割していた。ところが、このような共有=分割がなしえなくなる時がいよいよ近づいた。いつものように、寝床でソラが脚をばたばたさせたので、てっきり排泄かと思い、ソラのおむつを外してソラの無筋力の身体を支えながら排泄を待つのだが、そのうちソラの首がだらんと大きく弧を描きな

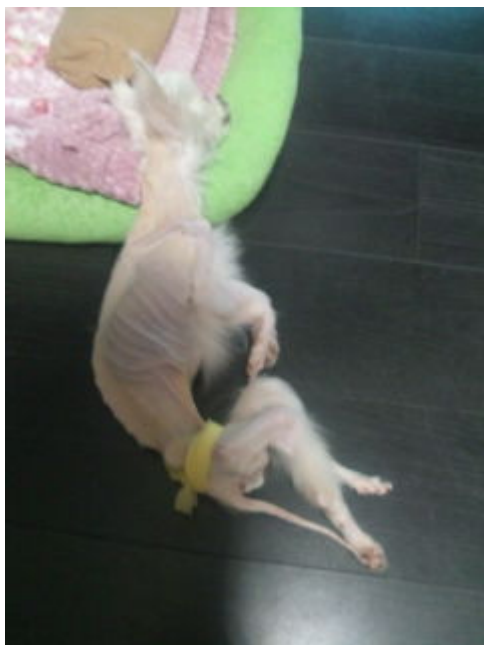
がら床に敷き詰めたトイレシートの上に倒れ込み、頭と床が衝突した。私はソラの首の骨が折れたのかと驚いて首と頭を支えた。その時のソラには半ば意識はなかったように見えた。それでも私の予断は崩れず、脇の下を私の両手で支えあげて待つことで、その前日がそうであったように、指遣いをせずとも、重力によって自然と便がぼたっと落下するのではないかと楽観したのである。

その時のソラの硬質な表情からソラの苦痛を私は感じた。それから数秒も経過しないうちに、突然、ソラの見えない両眼が見開かれてつり上がり、口を縦に大きく開いた。般若のごとき恐ろしい形相で、洞穴のように開いた口で呼吸を2回ほど試みただろうか。つぎの瞬間、ソラはこときれ、ソラの身体から微かに残存していた力までも奪い去られた。口を大きく開けた苦悶の形相があまりに恐ろしく、まるでソラの墓のなかを覗き込んでしまったかのように仰天し、私は「どうしよう、ソラが死んじゃう、どうしよう、どうしよう、ソラが死んじゃう?!」と誰かが応答するはずがないのに声をあげていた。急いでソラの心臓に手を当ててみるとすでに心臓は停止していた。そして急速に心臓から冷たさが胸から腹から周囲へと拡張されていった。拡張のさなかに、私が時計を見ると、時計の針は9月19日午後8時13分を示していた。あっという間の出来事で精確な時刻確認はできておらず、心停止の時刻は8時10分と推定した。ソラの死を日々覚悟していたかのような私であったが、死の到来は常に不意打ちだ。一方ではソラの墓のなかを覗き込んでしまったかのような仰天は、他方では、「死せる身体に至るまで延長された諸身体、身体が消滅するところにある屍体ではなく、身体の空間化の究極的な離散のうちで、死者[死体]ではなく、身体としての死者」(ナンシー,1996:41)の現前に私は圧倒されたのである。

もう排便どころではないと逝去した彼女のベッドに寝かせようとしたら、ベッドのなかにいつの間にか便が落ちており、死亡直後の肉体のゆるみで肛門から2つ目の便が出てくるところも私は目視できた。死亡したソラの形相は、心停止した瞬間の般若のまま、次第に死後硬直が開始されていて、顎が外れたくらい大きく開けられた口を閉じさせて、しばらく私の手が彼女の顎を押さえた。つりあがった眼の瞼をくっつけようと試みたが、瞼のほうはどうすることもできなかった。私は彼女の遺体を撮影することがかなわず、茫然としていた。私と対照的にハルは落ち着いていて、ソラの死に対する身振りは示さなかった。ソラが大きく口を開けた時、私は恐怖した。というのも、口の向うは闇の洞穴=墓場そのものに見えたためである。その時、ナンシーの開口と墓の記述が私の脳裏に浮かんでいた。

しかしながら、逝去した前日の昼間、ソラの胸が普段と違って遺体のように冷たく感じられ、口腔内は血の気がすっかり失せて真っ白で、触れてみるとやはり遺体さながらに冷たかったため、いよいよ「死者[死体]が身体として出現

する」(同前:41)時が近づいていることが予感された。その時に撮影した写真が以下である。



[(複数の介助へと)「延長された諸身体」]

※筆者撮影:2015年9月18日。

ナンシー『共同-体(コルプス)』41頁。

[「身を委ねること」の予感]

※筆者撮影:2015年9月18日。

ナンシー、同書、42頁。

ソラの葬儀は火葬される直前の「お別れ」、「火葬」、「喉仏や顎など骨についての説明」、「骨あげ(群れの成員などが骨壺に骨を納入する儀式)」一通り行った。お別れの接吻、私の唇とソラの口元の接触、触感は冷たいはずであるのに、温かく、生きていた時の私とソラとの間の触覚に変わりはない。刺繍の施されたきらきらする桜色の布地の袋に名入れと没年月日を書き込み、骨壺をしまった。葬儀から数日後、骨壺の蓋を開けて同じ群れの成員であるハルにソラの骨(結構黒く焦げた骨がある)を見せると、ハルの触覚が応答しソラの骨に顎の先端で接触した。言語活動がコミュニケーションツールではないハルにしてみれば、「ソラの骨だよ。会えたね、寂しくないね。」と言いつけてみたところで、ハルに意味が伝わるわけがない。言語が人間以外の動物にも伝わればよいとのだがという願いがあり、その願いには、動物の飼い主=人間の思い込みがある。

接触した後、顎を深く差し入れ、骨を食べる勢いであったので、手でハルの顎を制止し、私の脳裏には、ナンシーによる<ノリ・メ・タンゲレ(私に触れるな)>の文字が浮かび上がった。ナンシーがそうしたように、原典である聖書が

ら該当の箇所を引用する、「しかし、マリアは外で墓のところにたたずんで泣いていた。そして、泣きながら、からだをかがめて墓の中をのぞき込んだ。(中略)彼女は言った。『だれかが私の主を取って行きました。どこに置いたのか、私にはわからないのです。』彼女はこう言ってから、うしろを振り向いた。すると、イエスが立っておられるのを見た。しかし、彼女にはイエスであることがわからなかった。イエスは彼女に言われた。『マリア。』彼女は振り向いて、ヘブル語で、『ラボニ(すなわち、先生)』とイエスに言った。イエスは彼女に言われた。『わたしにすぎりついてはいけません。わたしはまだ父のもとに上っていないからです。(後略)』」(翻訳/新改訳聖書刊行会,2003:223)いや、聖書は資料である以上に時に聖典である。したがって、ハルとソラのエピソードが、聖書に記述されたイエスとマリアのエピソードに合致する言いたいわけではない。私が示したいのは、聖書学でも神学でもなく現象学として、ナンシーが『共同-体コルプス』<ノリ・メ・タンゲレ(私に触れるな)>で論考した課題に焦点を当てて、息を吹き返すことのない身体を、ナンシーの思弁に依拠し、出発=分離の立ち上げとして捉えることである。

6. 結び

心停止の際の苦悶するソラの大きく開けられた口のなかの深い闇、この闇はビオス誕生の「原理=始源」(ナンシー,2006:49)であり、「身体が把握=懐胎され」(同前:同頁)る「日=光の欠如」した経験とあってよい。冒頭に述べたアンドラゴジー(成人教育)の研究者リンデマンは主著『成人教育の意味』において次のように論じた。「成人教育の目的は、経験の範疇に意味を付与することであって、知識を分類することではない。(中略)『きわめてわずかなそこについて多くのこと』を知りつづけようとしている」(エデュアード・リンデマン:104)知識を分類することなく経験の範疇に意味を付与する、われわれ人間と動物の小さな群れ、ナンシーがいうところの「共同-体コルプス」は、かわるがわる触れているのに触れていないで与え受け摂取し排せつし眠り起き上がるなど、こうしたささやかな日常の働きにおける意味に組みした。糖尿病合併症心停止により逝去したソラ、超小型犬シニア特有の慢性心不全と折り合いをつけつつ生と死の間を往来しているハル、厄介な身体の状態にあり続ける私は生活の経験のなかで生かされ、群れという身体を共有=分割し、群れとしてわからなかったことがわかるようになる、変成する存在である。われわれは共に触覚を働かせて生きた。われわれの触覚もしくは接触の働き、「これは、確かに、『知』の事柄ではない、それは、重さであることの中に到来し、重みを量られるべきものとして奪い与える身体の事柄である。それは『意味の根源』でも『根源の

意味』でもない。それは、意味には根源はないからであり、それこそがそれそのもの、『意味』そのもの、**根源—なき—存在、延長—されるべく—到来すること、創造される—こと、あるいは重さであること**」(ナンシー,1996:68) 故である。

この重さは量られる重さ(同前:67)なのか。いや、量るということの意味は、知識による分類を離れて、感受するということではないか。したがって、接触到焦点を当てると、身体に到来する重さがビオスの育ちという「感覚=意味を**有限的**」(ナンシー,同前:84)に明示することはできる。意識が鮮明でないとき、眠っているとき、ぼんやりしている時、恍惚としている時、酩酊している時、われを忘れている時、ビオスは不在なのか。いや、存在している。なぜなら、触れているのに触れていない身体に到来する重さがある故に。よって、<触覚類>として重要な他者性を有する人間と伴侶動物は、触れているのに触れていない身体に到来する重さを感受することを通じて、わからなかったことがわかるようになる変成、わかるようになるというビオスの育ちにおいて接触の意味を示しうるのである。

謝辞 人間が幸せに生きるための学問としての現象学的教育学に関する、最初の機会を与えて下さった吉田章宏東京大学名誉教授に心より深謝申し上げます。

参考文献一覧

- アリストテレス(2001)『魂について』中畑正志訳<西洋古典叢書>編集委員*岡道男・藤澤令夫・藤縄謙三・内山料理・中務哲郎・南川高志,京都大学出版会
- エデュアード・リンデマン(1996)堀薫夫訳『成人教育の意味』学文社。
 <Eduard C.Lindeman,1926,"The Meaning of Adult Education",New RepublicInc.>
- 奥井遼(2015)『<わがざ>を生きる身体—人形遣いと稽古の臨床教育学』ミネルヴァ書房。
- 加國尚志(2007)「彼に触れないこと、メルロ＝ポンティエーデリダのポンティ読解をめぐる」メルロ＝ポンティ・サークル『メルロ＝ポンティ研究』:59-75.
- 金森修(2007)「装甲するビオス」編集委員*鷺田清一・荻野美穂・石川准・市野川容孝、石川准編『身体をめぐるレッスン3—

脈打つ身体』:3-26.

- 河合翔(2014) 「『障害と身体の現象学』という可能性—当事者が語る脳性まひの身体論」メルロ=ポンティ・サークル『メルロ=ポンティ研究』第18号:53-64.
- 國領佳樹(2014)「メルロ=ポンティの身体意識論」日本現象学会『現象学年報』30:99-106.
- ジャック・デリダ(2005) 鶴飼哲訳『生きることを学ぶ, 終に』みすず書房。
 <Jacques Derrida,2005,"Apprendre À Vivre Enfin ", Galiee.>
- (2006) 松葉洋一・榊原達哉ほか訳『触覚、ジャン=リュック・ナンシーに触れる』青土社。
 <Jacques Derrida,2000,"Le Toucher,Jean-Luc Nancy" Gallimard.>
- (2014)*マリ=ルイズ・マレ編、鶴飼哲訳『動物を追う、ゆえに私は(動物)である』筑摩書房。<Jacques Derrida,2006,"L'animal Que Donc Suis",Galiee.>
- ジャン=クリストフ・バイイ(2013) 石田和男・山口俊洋訳『思考する動物たち—人間と動物の共生をもとめて』出版館ブック・クラブ。
 <Jean-Christophe Bailly,2007,"Le Versant Animal",ayard.>
- ジャン=リュック・ナンシー(1996) 大西雅一郎訳『共同-体』松籟社。
 <Jean-Luc Nancy,1992,"Corpus",Metailie.>
- (2000a) 澤田直訳『自由の経験』<ポイエーシス叢書>未来社。
 <Jean-Luc Nancy,1998,"L'experience de la liberte",Galilee.> 惟
- (2000b) 西谷修訳『侵入者—いま<生命>はどこに?』以文社。
 <Jean-Luc Nancy,2000,"L'intrus",Galilee.>
- (2005) 加藤恵介訳『複数にして単数の存在』松籟社。<Jean-Luc Nancy,1996,"Etre Singulier Pluriel",Galilee.>
- (2006) 荻野厚志訳『私に触れるな—ノリ・メ・タンゲレ』未来社。
 <Jean-Luc Nancy,2003,"Noli Me Tangere",Bayard.>
- ジャン=リュック・ナンシー/ジャン=クリストフ・バイイ(2002) 大西雅一郎・松下彩子訳『共出現松籟社』松籟社。<Jean-LucNancy/Jean-Christophe Bailly,1991,"La Comparution",Christian Bourgois Editeur.>
- 新改訳中型聖書刊行会(2003) 翻訳『新改訳中型聖書—引照・注付—』いのちとことば社。
- 塚本昌彦・石川准「<対談>身体のコピュータ化、コピュータの身体化」
 *鷺田清一・荻野美穂・石川准・市野川容孝、石川准編『身体をめぐるレッスン3—脈打つ身体』:27-47.
- ダナ・ハラウェイ(2013a) 高橋さきの訳『犬と人が出会うとき—異種協働のポ

- リテイクス』青土社。〈Donna J. Haraway, 2008, "When Species Meet", University of Minnesota Press.〉
- (2013b) 永野文香訳『伴侶種宣言—犬と人の「重要な他者性」』以文社。〈Donna J. Haraway, 2003, "The Companion Species Manifest" Prickly Paradigm Press.〉
- 中田基昭 (2008) 『感受性を育む—現象学的教育学への誘い』東京大学出版会。
- (2011) 『表情の感受性—日常生活の現象学への誘い』東京大学出版会。
- 西岡けいこ (2005) 『教室の生成のために—メルロ＝ポンティとワロンに導かれて』〈教育思想双書 6〉勁草書房。
- 西岡ユミ (2001) 『看護ケアの現象学』ゆるみ出版。
- 藤本一勇 (2009) 「デリダのメルロ＝ポンティ批判」日本現象学会編『現象学年報』25:59-69.
- 村上靖彦 (2010) 「メタファーという治療装置—フォーカシング・フッサール・よしもとばなな」『現代思想』5月号第38巻第7号〈特集*現象学の最前線—間文化性という視座〉:23-245.
- (2011) 『傷と再生の現象学—ケアと精神医学の現場へ』青土社。
- (2013) 『摘便とお花見—看護の語りの現象学』医学書院。
- M.メルロ＝ポンティ (1969) 竹内芳郎監訳『シーニュ 1』みすず書房。〈Mauries Merleau-Ponty, 1960 "Signes", Gallimard〉
- (1970) 竹内芳郎監訳『シーニュ 2』みすず書房。〈Mauries Merleau-Ponty, 1960 "Signes", Gallimard〉
- (1994) クロード・フォル編、中島盛夫監訳、伊藤泰雄/岩見徳夫/重野豊隆訳『見えるもの見えざるもの』叢書ユニベルシタ 426, 法政大学出版局。〈Mauries Merleau-Ponty, 1964, "Le Visible et L'invisible", Gallimard.〉
- 矢野 泉 (2014) 「育ちと教えを統合する世話の現象学—メルロ＝ポンティにおける知見に着目して」『横浜国立大学教育人間科学部紀要 I (教育科学)』No.16:175-183.
- 吉田章宏 (2015) 『絵と文で楽しく学ぶ 大人と子どもの現象学』文芸社。
- 鷺田清一 (2013) 『〈ひと〉の現象学』筑摩書房。
- 渡邊敦司 (2014) 『情報を生み出す触覚の知性—情報化社会を生きるための触覚のリテラシー』DOJIN 選書 063, 化学同人。